

企業統治に世間の良き慣行を取り入れる提案

上原利夫

わが国の企業統治を有効に機能させるために、見落とししている点がある。それは日本人の心にしみ込んだ神への謝意であり、畏敬の念である。これが行事になっているのが初詣と言える。日本の家庭で神棚を拝むことは廃れているが、結婚式や地鎮祭には、災いを避け、幸を祈る神事が神主により行われる。

さらに、神社では祭礼が行われる。東京では江戸から伝わる神輿が町中を引き回され、屋台も出て大勢の人が集まる。大阪や東京では学問の神様といわれる菅原道真を祀る天満宮（大阪の天神さん、東京の湯島天神）も正月や受験期に参拝者で賑わう。京都の祇園祭、葵祭は観光者が見物する。

文部省唱歌の「村祭」では、「村の鎮守の神様の今日は目出度いお祭り日、朝から聴こえる笛・太鼓」「今年も豊年満作で村は総出の大祭り、夜まで賑わう宮の森」と唄われた。故郷の村祭が人と共に江戸へ移ったのが東京の祭かもしれない。年々賑やかになり、神事と祭は密接な繋がりを見せている。

昭和20年8月15日の敗戦後に日本で生じた変化は、神社への参拝の良き慣行が薄れていった。私が昭和22年から3年間通った大阪の男子中学は、神社神道の教えを教育理念としていたので、校門を入ると左側に鳥居と神殿があった。戦後は神殿に拝礼せずに登下校したので、神道の知識を授からなかった。国定教科書通りの教育が行われたに過ぎない。指導精神が曖昧になった学校は廃れていくので、10年前から男女共学として神道による教育方針を確立した。部活では茶道や華道も取り入れ、神楽の舞が特色を出している。一般教育が中心だが、校舎は段階を踏んで新しく建て替え、中学を別棟にして、講堂、図書館、食堂を中学、高校共通とした8階建てのビルとし、屋上から伊勢神宮を遥拝できる。校門の外からも見える場所に鳥居と神殿が新築され、生徒は礼拝する。生徒数は2千人を越し、文武両道の教育が定着している。私が通っていた頃には想像できない和魂洋才への変化である。

この変化を知った3カ月前の平成28年8月8日に、今上天皇の生前退位に関するお気持ちが報道された。かねてより象徴天皇に関心を寄せていたので、象徴の行為が企業でも実践されれば、企業に不祥事はなくなるのではないかと思っていた。株式会社には3人以上の取締役がおり、監査役も監視しているが、

明治以降に制定された企業統治のシステムがうまく機能していない会社が多い。欧米式の発想や行為が日本の風習に馴染まない点もある。しかし、自社に神社を祀っている企業もある。独特の哲学を励行している創業者として松下幸之助氏や出光佐三氏の企業哲学と行動は、世間の良き慣行を取り入れている。代表的な日本型企业統治の事例である。

一方では、日本には欧米式の学校教育で行われているが、社会は近代化されず旧来の風習が残っている世間がある。私の畏友・阿部謹也君（歴史学者・元一橋大学学長）が世間の研究を行っていた関係で、彼の死後、日本世間学会に入り研究の真似事を始めた。日本の企業統治の改善を目標としていたからである。私は監査役制度の欠陥を研究する傍ら大学院の法学研究科博士課程で勉強した。その後も、監査役の限界とその超越方法を研究して、日本の企業統治方式を改善したいと思っている。

新しく辿り着いた方式は「会社の象徴」という会社法にない概念の活用である。ハードローである会社法に収まらない概念であるから、最近、行政上採用されているソフトローである「コーポレートガバナンスコード」のようなもので対応することになる。言わば世間の良識に属することである。戦後の日本人が等閑にしてきた神事でも、家屋やビルの新築のとき、地鎮祭が行われるのは何故か。私が過去に勤務した通信衛星運用会社がロケットで衛星を宇宙に打ち上げる前に、社長以下の会社幹部が宇宙に関連する神社に参詣し、打ち上げと打ち上げ後の無事を祈願している。

会社法には監督、執行、監査の機関として取締役、監査役が定められているが、象徴という機関はない。けだし、会社を象徴するのは創業者である。例えば、ソフトバンクグループの孫正義社長（CEO）である。しかし次期象徴の決め方については、この提案では、問題意識を企業者に持ってもらうところで終わりたい。

日本には長寿企業が世界で一番多いという。私が思い当たる理由は、神社の働きである。神社の祭は考えさせられる大きな要因である。祭は楽しい。日本人に喜怒哀楽の喜びと楽しみ与えているのは、神様ではなかろうか。喜びと楽しみを感じさせる会社に不祥事は起こらない。喜怒哀楽の意味を知らしめる会社にするには、神道の力が必要なのかも知れない。(2016.12.10)